

京都産業大学同窓会報 NO.35 同窓会設立30周年記念特集号



井上 猛

理学部教授
理論天文学

京都産業大学同窓会報 NO.35
同窓会設立30周年記念特集号

前進に成長に励んで一段また一段

同窓会設立三十周年の記念号に、小文を載せて頂けると云うのは此の上もなく光栄な事に思います。この「三十」と云う数字、今の私には甚だ意義深いものを感じられます。本学に來まして今年は三十二年目ですが、初めの二年間は、パリのポアンカレ研究所の方に

行って居ましたので、実質では三十年目と云う事になります。大きな節目な訳ですから、心を新たにして授業に勉学に励みたいと考えて居る処です。惑星や人工衛星の運動理論等に関心を寄せる研究者の集りに『天体力学研究会』と云うのがあります。これが昨

年三十周年を迎えたのです。此の会には、早くから加わって居まして、一年一回の研究会には欠かさず出席し、折りの成果を発表して来て居ます。もう一つ『成長談話会』と云う研究会にも加入して居ますが、これがまた、昨年三十周年を迎えたのです。この会は、

医学部や歯学部それに獣医畜産関連の研究者が主要な構成員なのです。そこに縁あって数年前に入会したのですが、これで居て毎年の年次大会ではテーマ「成長」で発表して来て居るのです。

「成長」と言いますと、生物の成長のみが対象の様に思われるかも知れませんが、そうとばかりは限りません。経済成長と云う言葉などが日常的に使われて居ます様に、種々の社会活動・社会現象も、十分に研究の対象となり得るのです。新しい商品が開発されて市場に登場、次第に消費者の間に広まって行くと云う「流行現象」などがその好例の一つです。

ところで、これ迄の成長理論と云うのは「ひたすら成長し続けて行く」と云う描像の下で考察され研究されて来て居ました。此の世の常として、物には成長期があれば必ずや衰退期もあるものです。今は昇り調子であっても何時かは最盛期を迎え、やがて下降線を辿ると云う例は一つならず目にする処です。そこで此の姿をその儘に映し出

す様なものがあっても良いのではないかと考えて、天文学の分野で培った細やかな知見を基に、理論の拡張を試みました。成長の理論と云うのは、単に手許にある過去のデータの分析をする為にだけあるのではなくして、未来予測に供する事も出来るのです。世に「バブル」なるものがあつた相ですが、その様なものが限りなく続く筈がなく、ピーク時が何時で破滅は何時頃と云うのも十分に予測出来た事でしょう。

希望に胸ふくらませて、此の神山の地にやって来たのは二十代後半の事でした。それが華甲を迎えるに至つたのですから、その間に数多くの学生を迎えそして送り出したのも当然の事になります。ゼミで共に学んだ学生の進路も様々で、公務員・起業家・教職員を初め、製品開発や国際交流の分野で活躍中の青年等々、実に頼もしい限りです。暫くの間、天文同好会の顧問もして居ましたので、全学部全学年の学生とも知り合う機会に恵まれました。此のサークルは、先輩の提言でOB会な

るものを創設、毎年秋に集まりを持つて居まして、私もOBの一員なものですから出席するのを楽しみにして居るのです。此の四月からは、講義『宇宙観』に、他大学の学生も受け入れる事になりました。これ迄以上に広い視点から評価される事になった訳ですから、更に良い授業をと情熱を燃やして居る処です。

長い間ずっと関心を寄せ取り組んで来ました、水星の運動に於ける近日点



の問題を、極く最近になって、完全解決を見る事が出来たと信ずるに至りました。此の問題を初めに言い出したのは、フランスのルベリエで一八五九年の事です。彼は、それより十三年前の一八四六年に、当時は未だ知られて居なかつた海王星を、紙と鉛筆だけで発見に導いたと云う大天文学者なのです。

今日では、ルベリエ提起の此の問題は、アインシュタインの一般相対論が余す処なく解いた事になって居ます。此の様な状況下で、事もあらうに、ルベリエの理論の中にミスがあつて、これを修正すれば、問題そのものが完全に消滅して仕舞うと云う事に気付いたのです。事が事ですから、主張した処で、容易に受け容れられる道理のある筈がありません。

今日、エネルギー保存の法則を無視しては、人も宇宙も論ずること能わずですが、一八四二年にドイツの物理学者マイヤーがこれを公表しようとした時には、直ぐには受け入れられませんでした。それで居て、事の重大性に気

一九九六年三月ラムサウにて。左からマルシャル博士、ブルターニヨン博士、井上、スン教授。マルシャル氏は一九八〇年九月に来学、理学部で宇宙開発について講演。



付いた他の研究者が自分の発見だと言つて発表したものですから、すっかり落ち込んで仕舞いひっそりと生きて居た様です。その為に存命中にも拘らず、彼の業績を紹介しようとした講演の中

でさえ、「故人」として扱われたと云う事です。

三年前に、私の立場に理解のあるウーン大学のドウボラク教授の招きでオーストリアはラムサウでのシンポジウムに参加し発表の機会を得ました。けれども、印刷公表の段階では他の研究者等からの「アインシュタインの結果に反する」と云うクレームの為にボツになりました。別に消沈したりしては居ません。此の問題に関する知見は、ここ数年間『天体力学研究会』開催の度に発表し、主張の総ては『集録』に収められて居ますので、あとは静かに陽の目を見るのを待つだけですから。

解くべき問題は未だ未だ山程あります。今後とも、一步一步着実に前進して行きたいものと、心を引き締めて居る処です。小文を閉じるに当って、皆さん方の御活躍を心よりお祈り致します。(一九九九・六・三十)

京都産業大学新聞に寄せた

『フランスに於ける宇宙開発』

なる記事の控え。99404D

今年の初めフランス国立宇宙航行研究所(O. N. E. R. A.)のマルシャル博士(Dr. C. Marchal)から、九月に東京で開かれる国際宇宙航行連盟の国際会議に出席の為訪日の予定である旨の便りを受け取った。マルシャル氏は、理学部の吉田淳三教授と天体力学、分けても三体問題の定性的研究に於いて、密接な関係を持って居られ、これ迄にも頻繁に連絡を取って来て居られる処である。私自身は摂動論や相対論の分野を通して、ここ十年来友人関係を保って来て居り、同氏の来日の折りには是非、再会したいものと思つて居た。1978年五月に東京で開かれた国際天文学連合主催のシンポジウム太陽系の力学の際には吉田教授共々に、マルシャル博士とも討論したり歓談したりする機会を持つ事ができた。

マルシャル博士は、天体力学・一般相対性理論・人工天体軌道の最適化・微分方程式論等々の分野で数々の研究業績を挙げて来て居って、国の内外を問わず精力的に活動を続けて居る新進気鋭の研究者である。

こうした事情を踏まえて、同氏来日の機会を本学学生諸君の為にも活かさないものかと考え、マルシャル氏の本学への公式招待方を大学当局へお願いした。大学は、此の希望を快く受け入れて下さり、お蔭で、学生を対象とした講演会を開催する事ができた次第である。

『フランスに於ける宇宙開発』と云う演題のもとで、フランスが当面目標として居るのが、静止衛星に依る通信網の充実確立と云う事であり、アメリカのスペース・シャトルを利用しての有人宇宙実験室の打ち上げである事等を具さに聞き知る事ができた。フランスと雖も、こうした開発を単独で行なうのは荷が重過ぎる上に「一国の利益を追求する」と云うよりも寧ろ、ヨーロッパ全体の利益を考える、と云う観点から共同開発をも望んで居って、既に昨年クリスマスの宵に、そうした協力衛星アリアーン第一号が打ち上げられたと云うのも知る事ができた。ただこうした場合、主義主張を異にする国々へも、相互の情報、音声映像共に鮮明な形で流入し合う事になって、思いも掛けない政治的な難題を惹起し兼ねないと云う事であった。聴衆の中からは、講演の途中にも数々の質問が寄せられたりして、活発で有意義な講演会であったと喜んで居る。

その後に計画されていた談話会では、制限三体問題に於ける同氏の最近の成果を、本学研究者の前で発表、密度の高い会合であったと思つて居る。

今回この様に極めて有益な機会を持つ事ができたのは、大学当局を初めとする関係各位のお力添えのお蔭である。ここに記して、心からの謝意を表する次第である。

(井上猛・1980年10月31日・記)